

立教大学日本文学

第一一五号

二〇一六年一月

目次

講演 「シマコトバでカチャーシー」	崎山 多美	2
『源氏物語』における「ありがたし」	泉屋 咲月	14
『源氏物語』における「みるめ」表現 —— 明石の君を中心として ——	大竹 明香	27
葵巻の光源氏と六条御息所 —— 「ことづく」の織りなす関係性	落谷 雄輝	41
『待賢門院堀河集』注釈（七）	加藤 睦	55
美辞麗句によって「幻出」される風景	松本真奈美	69
明治三十年代の『文芸倶楽部』を視座として ——	湯本 優希	83
黒岩涙香、日本探偵小説の始祖になる —— 涙香評価の転換点	落合 教幸	89
島崎藤村『新生』を読むことをめぐって ——	金子 明雄	96
—— テクストに折り返されたスキヤンダルと文学のあわい ——	小林 実	116
中山省三郎とツルゲーネフ	石崎 等	130
火野葦平の〈戦争〉I —— 中国戦線からファイリピン戦線へ ——	松本 和也	143
—— 火をもてる蛍灯に来て死ににけり（ファイリピン・パターン）山中での辞世吟 ——	小櫃暢太郎	157
堀辰雄における「認識」の問題 —— ベルグソンを視座として	渡部 裕太	171
肯定し、探り続けること —— 梅崎春生「蜆」論	影山 亮	185
マーケット街の光と闇 —— 同時代の人々の目に映る池袋 ——	小菅麻起子	199
歌人〈寺山修司〉と歌壇の関係 —— 短歌総合誌を中心に ——	乾 英治郎	214
小松左京「日本アパッチ族」論 —— 〈進化〉の夢・〈革命〉の幻想	小嶋菜温子	228
国際交流活動報告・二〇一五年	鈴木 彰	230
(一) 韓国外国語大学でのシンポジウム共催について	後藤 隆基	232
(二) フランクフルト大学での研究会参加について		236
書評 松本和也著『平田オリザ 〈静かな演劇〉という方法』		
新刊紹介		
彙報・編集後記		